



TITLE:

[筑]後川三角洲の研究

AUTHOR(S):

堀, 米次

CITATION:

堀, 米次. [筑]後川三角洲の研究. 地球 1931, 15(6): 437-451

ISSUE DATE:

1931-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183913>

RIGHT:

も、既に經濟的中心地に移轉するに至つた。試みに管轄地域の古と同じきものにて町村役場の位置を考ふるに、「麓」と一致せざるもの大字名中拾九、其中最近「麓」より他に移轉せるもの參、之を小字名中に考ふれば「町」「在」に著しく進出せるを見る。然れども尙大多數の「麓」は新興主要聚落の根幹をなし、其特異の景觀を存して、古き形態の居住地として現存するのである。

最後に筆を擱くに際し、薩藩領百拾有餘の地方に亘りて、同一景觀の下に分布する「麓」なる軍事的聚落は我國聚落分類上に於ける一特異型をなすものとして、吾人は茲に麓式聚落の存在を提唱し得るものと思ふ。

【註】(1)秩祿處分額末略 小野武夫博士 舊鹿兒島藩ノ門割制度

(2)鹿兒島縣蛤良郡蒲生町

筑後川三角洲の研究

堀 米 次

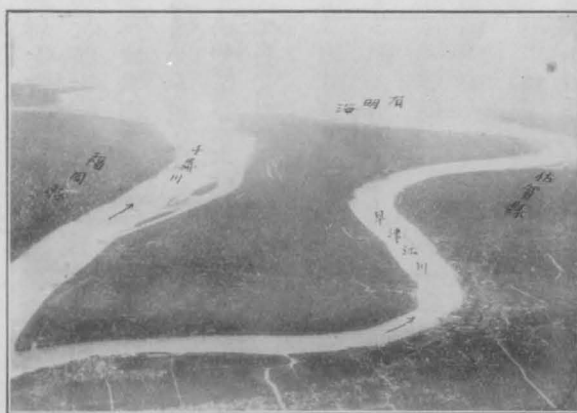
緒 言

阿蘇火山群に源を發して蜿蜒百四十料。有明海に注ぐ九州一の長流筑後川は、極めて長き星霜の間にほゞ三角形の筑紫平野を形成した。此

の三角形の底邊の中央部、河の海に注ぐところに寫眞に示すが如き瓢形のデルタがある。これが即ち次に記さんとする大野島であつて、此の瓢の上體は筑後に其の下體は肥前に所屬するの

である。此の筑紫二郎の持つ三角洲で、現在完全なものが二體ある。其の一島は前述せる大野

第一圖



筑後川河口の航空寫眞
(太刀洗飛行隊撮影)

島で、他はその北端から約一軒半の上流にある大中島である。大中島は東川副村といふ一村の一部を構成するに過ぎないが大野島は福岡と佐

賀の兩縣に跨り、優に二ヶ村を包容せるを見ても判る様に、其の面積は大野島の方が遙に大である。本稿に於ては、主として、大野島について其研究を記載しよう。

(参照地圖 二萬分の一 佐賀圖幅並に沖端圖幅)

發達の史的考察

現在の大野島の存在する附近は、今を去る約四百年前即ち享祿、天文年間には海波洋洋たる海面であつた(これを地方人は松枝沖と呼んでゐた)。然るに何時の頃からと言ふとなく大きな樹枝が此の海面の中央に流れ止まり(おそらく當時水面下に發育せる淺洲に筑後川から流れて來た樹枝が滯留したものであらう)。これに多くの塵埃が停滯して遂にそれらは游泥と共に沈澱して、此處に一つの洲が次第に出來あがつたのである。次いで元龜、天正年間になつて、其附近に更に一個の洲が發育、出現した(享祿年間から約四十四、五年間經過せり)そこで地方人はこれらに雄島、雌島の名を命名したのである。

第二圖 筑後川河口の古地圖其の一



(部一の形地岸海明有前年十三百二)

(此の二個の洲が次第に成長して遂に合併して
瓢形の一島を形成せるのが、今日の大野島であ
る。)

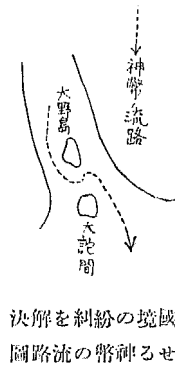
これらは文祿年間になると次第に高じて、愈々明瞭なるデルタとして、すこやかに發育したのである。當時の佐賀の藩主泰盛院は、鍋島安

藝守茂堅に命令して、此の寄洲の中央に龍王の神石を建立せしめて、先づ此の洲に先占の意を表したのである。これは嘗て世界探險時代に於て新發見の陸地に各國が競ふて先占を表明せる如きものであらう。斯くて此の神石を基として漸次土砂は廣く堆積して、遂に完全に固結せる島が形成されたのである。因つて元和九年(徳川二代將軍秀忠の時代であつて享祿年間から約九十年経過)になつて、時の藩主は命じて、此處に入大龍王の神祠を建立せしめられた。然し當時は未だ此處は耕地としての利用はなく、従つて人文的價値は有せなかつた。然るに此の洲が一年一年と陸地としての形態を呈して來るにつれて、此のデルタを中心にして紛糾が起つて來た。即ち肥前の佐賀藩と筑後の柳川藩との間に、此の新しい島を中心として肥筑兩國の國境問題が屢々起つたのである。此の爲に兩藩は不和になり、遂に正保年間に至つて兩者より代表者を出して談判せしめ、次の如き協定が成立した。即ち兩國境は人意によつて決定すべきもの

にあらざる神の御意志により決すべきであるとして、先づ神幣を柴に結束して筑後川に流して、其水勢によつて流される柴の流路の示すところを以つて肥筑の國境とするといふのである。其の結果は次の如き神の公平さであつた。

斯くて神の意志と大自然の自然的必然の力によつて營まれてゐる自然の大建設的營力の上に初めて人間の意見が加えられ、遂に雌島、雄島

第三圖



國境の神幣を糾紛の流路を解決する

を各々一個宛分領することゝなつた。當然、次ぎには此のデルタの上に人文活動が開始される結果となつた。

扨て筑後川口の此の洲に最初に農耕の鋤を下すべく、有明海面の大于拓事業のアンラーゲにも相當する土木工事を營みしものは、佐賀の武富大郎兵衛（後久右衛門と改めた。現在の武富

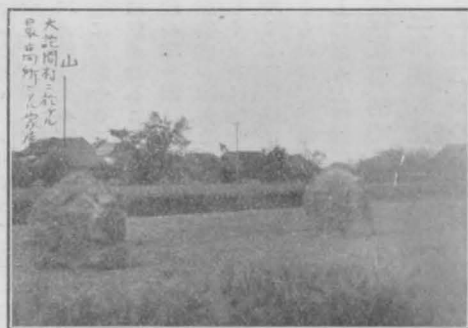
時敏氏の先祖である。）であつた。即ち彼は此のデルタに田畑を作る爲に埋築を出願して、遂に許可を得て先づ前記の龍王神祠の東北に當る所に五十餘町歩の土地を埋築した。これが寛文年間の初統に落成したのである。現在、此のデルタは全體的に其標高が甚だ低く殆んど全く起伏なき一平面の土地である。然し其中、割合に高さところは地方人には「山」といふ地名で呼ばれてゐる所が佐賀郡大詫間村にある。此處は附近の土地より二呎乃至三呎内外の高所であつて其爲に排水にも水害の豫防にも最も都合がよく此の村に於ける最も稠密なる聚落地である。此處が實に本デルタ結成の核心をなせる所であつて、武富大郎兵衛によつて最初に營まれた耕作地であるらしい。

左の寫眞は「山」を中心とする聚落の數軒を撮影せるものであつて、其中一軒が附近の家屋より僅かに高所にあるを注意せられたい。（寫眞に見る如く本村の家屋は殆ど大部分は藁葺である。此藁は又彼等村民の重要な燃料でもあ

る
(

斯くて初めて經營されたる新田五十町歩の中
彼は先づ其の中の十五町歩を宮に獻じ、更に十
二町歩を深堀太夫（武富大郎兵衛の舊恩人）に

圖 四 第



落聚るせと心中を『山』

て農耕せしめたのである。これが實に本村に於ける經濟活動の起原であつて、これは其後、自然と人力の協同によつて次第に南方にも北方にも

進呈して
殘る地面
を自己の
有とした
そして此
の新田に
彼の妻の
里方たる
下村氏の
知行所の
百姓を移
住せしめ

圖 四 第

山

大田間村の山

落聚るせと心中を『山』

も成長して遂に柳川藩のデルタと接合して今日に到つたのである。

(右の文獻は八大龍王社記錄、武富氏家傳記に據る)

現在の地理的考察

地形 前述せるところによつて、此のデルタについては我等は次の事項を知ることが出来る

1、此のデルタは發生から今日まで約三百七八十年間を經

第五圖

筑後川口附近の古地圖其の二



(形地岸海明有前年十三百)

過せること。

2、此のデルタが現在の發育に到る迄には、嘗ては二個の小三角洲なりしことがあつたこと。

3、此の二個の小デルタは各其結成の中核部を有すること
4、此の二個のデルタは各々成長して遂に合併して瓢形を呈するに至りし事。

5、三角洲發生の當初の中核は今日では三角洲の上方（北方）に位置せること。即ちデルタの發育は上方よりも下方に旺盛なること。

6、此の三角洲は核を中心として縦に南北に中斷すれば大體對稱的地形を呈するが、これに直角に切斷すれば、著しく上方に脊せ下方に肥滿せること。

7、斯くして構成されたる此三角洲が尙其の發育の途上にあるものは、其附近に發達せる小三角洲或は砂洲をも合一して益々大規模に成長するものである。

といふ様な事柄である。

此の三角洲も元龜、天正年間に發生せる雄島雌島とよぶ二個の小洲が、後に第二次的に結合せるものであることは既に述べたところである。而して此の二島の結合前に既に肥筑兩國の境界は定まり、其上流に位するものは筑後に、下流に位するものは肥前に配せられて、其兩島

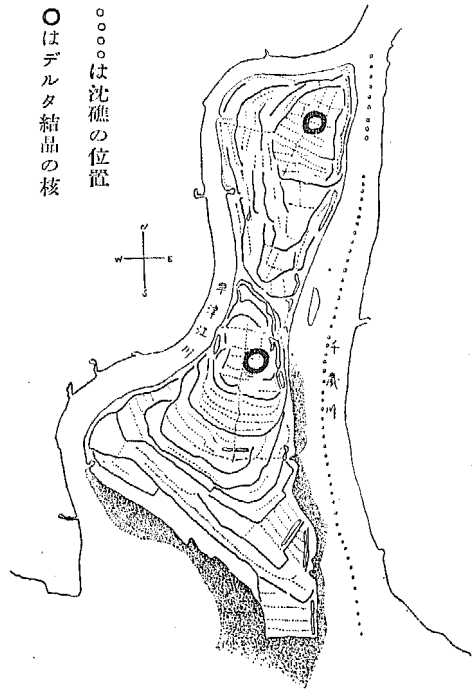
間の水路は、當時盛に帆船の通路として使用されてゐたのであつた。然るに年々に成長する砂洲は遂に全く二島を結合して、嘗ては舟路なりし水面も今は全く綠田と變じてゐる。そして現在はその跡に小船の碇泊所程度の引込水路が僅かに残つてゐるのみであつて、それが昔時の河道の跡たるを物語つてゐるに過ぎない。

一、デルタ上の地形

今二萬分の一沖端圖幅及佐賀圖幅にて其地形の大體を熟視するに、前述せる「山」を中核として結成せる本三角洲には、其處を中心として數多の同心圓が極めて複雑に描かれてゐることに氣が附く。

成長線 而してこれらの同心圓は其中心が著しく北偏してゐる。それは、この三角洲の發育が南方に最も旺盛であり、東方及び西方はこれに次ぎ、北端には最も微弱なりし結果を示す明らかなる証據である。これらの同心圓の線を構成せるものは、多くは堤防と溝渠とであつて、こ

第六圖



筑後川三角洲の同心圓的發展構造

れに次いで畑列、竝木、道路、聚落列、畔道等もある。然しこれらの殆んど凡てのものは、もともと堤防であるか、又は堤防上に作られたものである。これら數多の堤防は、外方のもの程、高さも高く、形も完全に保存されてゐるが、内方に及ぶにつれて次第に低く不完全なものが多く

俟たない。これらの堤防は多く土居(ドキ)なる名で呼ばれ、この土居によつて圍まれてゐる一面の廣々たる緑田を堀(ガラミ)と呼んでゐる。そして普通に此の堀には、これを築造开拓せる時代名或は人名等を附して何々堀とよんである而してこれらは其殆んど大部分は土壘であつて

遂に全く磨滅消失して、僅に畑列或は道路等が其痕跡を示すに過ぎないものもある。然しこれら堤防は現在是如何に不明瞭なものであつても、嘗ては此の三角洲が自然的に或は人爲的に發達するに従つて南方からの海水の浸入を防止する爲に古人によつて作られたるものである。これら同心圓狀の堤防列は内側のものほど、時代は古く外側のもの程新しき時代の築造たるは論を

石壘は甚だ少ない。大野島デルタに於て石材を使用せる堤防は、元治搦、大正搦、茲に昭和搦（これは現在築造進行中）等に過ぎない。これらの石材は多くは有明海の對岸なる藤津郡大浦村なる玄武岩（これを俗に大浦石とよぶ）或は附近の安山岩等を、舟運によつて持ち來り、満潮に際して直接に工事場に陸上げして使用してゐる（有明海岸の干拓事業については他日稿を改めて詳記することにしよう）。蓋し石材使用が昔時は少なかつたのは附近に其產出がなかつた事と其干拓事業が小規模なりし爲に遠路よりこれを運ぶことを、せなかつたによる。

而して此の堤防に平行して、其内側或は外側に稀には其兩側に、殆んど全部に亘つて濠渠を作つてある。これらは多く堤防築造に際して、其土材は此處を掘ることによつて得た所であつて、これはやがて農耕の際に於ける主要なる貯水池として利用されてゐるものである。本島の如く地形平坦にして、しかも殆んど鹹水によつて圍繞されてゐる土地にあつては、灌漑用水と

しても、又使用水の供給池としてもこれは頗る重要なものである。而してこれらの堤防には、其新舊や大小の別こそあれ、凡て嘗ての海面干拓の際に築けるものである。これらの各々の堤防線の最後に潮止せる個所の内側に當る濠渠は其深さも幅も、他の部分より大規模であつて、普通其處には開閉自在の水門が設けられ灌漑排水に便されてある。一望單調無味なる此の自然の地形に、堤防線と濠渠列こそは本地域に於ける最も變化ある景觀を與へてくれるものである。即ちたゞ水田の連續のみである此の地域の農村景觀に變化を與ふるものは、殆んど全く此の堤防線上を利用せる人々の營みである。

堤防線 堤防は其位置によつて利用も種々であるが、本域の最南端たる元治、大正、昭和の各搦の堤防の如きは、黒ずんだ玄武岩の石垣が徒に雜草の茂るにまかせられて恰も城塼の如く長々とめぐらされて、満潮時には多良岳風によつてさわぐ激浪のしぶきを全身にあびるにまかせてある。其内側なる應久搦や永久搦を區切

る笹土居^{サドキ}の如きは、幅十米前後の大規模なる土壘であつて、既に其名が示す如く一面に笹竹の密生がある。この笹は單に土壘を緊束する爲の目的らしく年に一回、村にて入札に附して燃料用として賣却する程度のものであつて竹材としての使用には適せぬ小型のものである。

笹土居の内側の堤防を俗に松土居^{マツドキ}と稱して、これは文政搦、享和搦等を區切つてゐる。松土居は此の大野島三角洲隨一の美しき松の竝木であつて日露戦役の戦勝記念として此の堤防上に植林されて、既に高さ十米前後に伸び本村を大體東西に貫通してゐるのである。松土居の中央には道路を通じ（笹土居にもある）此の三角洲の東西横斷交通幹線をなすものである。此植林の主目的は防風林として此の奥地の風害を防止する爲に設けられたるものであつて昭和五年七月の大颱風の場合の如きも與つて力あつたと言はれてゐる。その爲に松樹の伐採や枝下し^{ササ}は固く禁ぜられてゐて年々筑紫平野を訪れる無數の候鳥が常に翼を休めるところとなつてゐる。從

つて其樹下には、それらの鳥群によつてもたらされる植物の種子が鳥糞に混じて此の平坦地には珍らしい深山性の植物の發芽をなさしめてゐるところもある。松土居の内側の堤防を樟土居^{サウジ}と稱し天明搦、卯年搦^{ウツシザラキ}、其他を區切つてゐる。

此の樟土居からは其堤防自身が一つの畑作物の耕地として初めて利用されてゐる。一體、此村全體が土地低平であつて濕潤し易く、從つて畑作には不便の地が多いことが、遂にかくの如く堤防の畑地利用となつたのである。樟土居も最初これが直接に海洋に面してゐた當時は専ら海波と海風の防禦として設けられて、其上に既に其名の示す如く樟樹の植林があつたのである。然るに現在はその樟樹は僅かに數十米毎位に残されて、其間には多くは蔬菜畑或は桑園として耕作されてゐる。但し桑園の如きは、其成長悪しくむしろ本村經濟の立場からは他に利用するのが得策ではあるまいかと思はれる状態である。然し本村の養蠶業が佐賀平野の低地帯としては相當に他を凌ぐ地位にあるのは、全く堤防上の利

用から來た結果であらう。

聚落 樟土居の内側なるは俗に二番堀と稱する大規模なる堤防である。二番堀として特に面白いのは、この堤防が初めて聚落地として利用されてゐることである。即ち此の三角洲に於ける最南端の聚落が此の二番堀に營まれてゐるのであつて、その堤防上に一列をなす家屋列である。

堤防上の家屋列は此の地方人の最も恐れる、高潮の害(有明海水が平野に廣く氾濫する現象)や又は豪雨時の家屋の浸水等に對して其危険率が割合に少ないからである。其上卑濕なる低原地に於ては此堤防上の如きは最も健康に適し、又日常生活で家屋のすぐ側に蔬菜畑や果樹等を得られる等の便宜がある。矢張り此處にも堤防の内側に一筋の濠渠を有することは他と同様である。然し此堤防上の家屋も、去る明治七年八月十日に當地を襲ふたる高潮によつて見事に破壊流失され此の大訖間村に於てすら四十七人の死者を出したるが如きは自然の大偉力の前には

かゝるものは殆んど無抵抗であることを示すのである。

二番堀より内側にある堤防は、多くは既に其原型を止めぬまでに磨削されてゐる。此の磨削作用は自然の風化磨滅によることは勿論なるも其上に人によつて耕作或は破壊撤去されてゐる事も多い。そして現在、僅かに附近の水田よりも高き一列の畑地が東西に走つてゐたり、或は一筋の道路のみが嘗ての堤防跡を示す所もあるし、更に甚だしきは堤防は全く磨滅されて水溝のみが残つてゐる所さへある。

而して前述せる大規模なる堤防と堤防との間にも、よくこれを見る時には更に幾多の小區劃に分たれてゐる所が多い。それは嘗て數多の小干拓事業が行はれたものらしく、例へば松土居と樟土居の間の如きは享和堀、申年堀、西堀、西丈五郎堀、寅堀、中堀、東堀、千年堀第一、全第二、文政堀等の小區に分たれ、其各々は海面干拓當時の年代或は其經營者等の名で呼ばれてゐる。これらは皆小規模であつて堤防は畑地

となれるものもあるが、中には開墾されて全く全一平面の水田となれる處さへある

次に大野島デルタの東南半の航空寫眞を示して上文との對照に便しよう。

道路線 左の寫眞にも明瞭なる如く、此のデ

第七圖



大野島デルタの東南半の航空寫眞
(太刀洗飛行隊撮影)

筑後川三角洲の研究

ルタの主要部落は甚だしく北偏して發達してゐる、従つて此の村の南北を貫通する交通系は前述の堤防列や濠渠線に對して多くは直交をなしてゐる。而して此の南北系の道路も、堤防間を小さく區分せる小堤防の南北方向をとれるものゝ上を走るものが多い。そして此の道路も多くは其一侧或は兩側に水溝を伴ふこともある。これらの水溝は普通に於て水の移動を見ないのは土地が全く平坦なるが爲である。然も雨期増水時には極めて徐々ではあるが南流すると云ふ。此南北方向の道路上を農夫は村の北端の部落から遙々と南方まで農耕に出かけるのである。それも殆んど皆自轉車であつて、鋤も辨當もそれに乘せて堤防を越す時にのみ阪道となる外は全く平坦なる水田の間を疾走するのである。土地が斯くの如く低平なる爲に雨の時は特に惡路となる。故に聚落地の道路には其の中央に石壘を一系列敷いて歩行に便にしてある。秋に水田に立ちて稻刈る乙女も俗に「ヒラク」と稱する下駄形の大形の板を足にはきて泥土にねり込むを

防止して働ける如きは面白い農村風俗である。

用水 斯くの如く四面、水に恵まれたる低濕のデルタに住む農民が、常に其用水になやまねばならぬことは、眞に皮肉な事である。彼等は如何にして清澄なる淡水を得るかといふと主

として次の方法によるのである。彼等の家庭にある井戸は、飲料水ではなくして、單なる使用水を供給するに過ぎない。それは井水に鹽分或は有機物等が多くして到底其儘では飲料には適しないのである。彼等の飲料水の水源は實に筑後川の河水である。然し、有明海の満潮時は筑後川にも潮の逆流ありて飲料水汲取りは不可能である。故に多くは干潮時に於て、まさに満潮の初まらんとする場合に、これを汲むのである。即ち流れつゝある河水は、干から満にうつり初めた海潮に押されて一部逆流せしめられたるものを汲むのである。そして普通の家には一石以上をいゝ水甕二個以上を備へて、河より汲める濁水は一日間これに溜めて、其清澄になるを待つ。そして二個の水甕の水は一日置きに交互

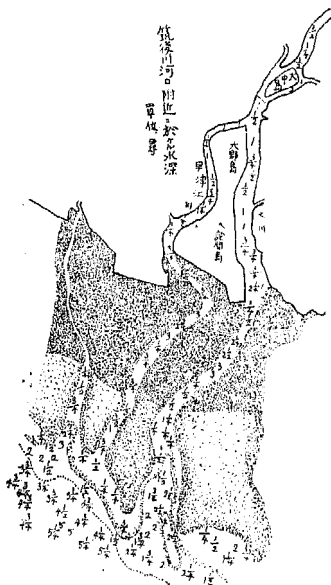
に煮て使ふのである。若し筑後川の上流に疫病流行の如きことあらば、村内の濠渠の滯溜水を用ひ、或は天水を甕に導きて使用し、更に止むを得ずんば井水によるのである。

二、海岸地形

洲 筑後川が有明海に注ぐ際に、河水が物理的に運搬せる土砂は、河口附近にて其儘沈降堆積するのであるが、其極めて細かき微粒子は海にまで運ばれて海底に沈澱する。それが海潮の満つにつれて再び攪拌されて濁水として海岸又

第八圖

筑後河口附近の海圖



は河道内に逆流する。次に其濁水は泥土を沈澱せしめて引潮となる。かゝることが四時繰返されるにつれて海は次第に浅くなり遂に淺洲として發達をみるのである。然し第六圖に示せる如く、デルタの南端が著しく海中に突出せるは最近の海面干拓によるのであるが、其干拓たるや其處に發達滯留せる泥土の淺洲をグランドとして利用せるものであることは論をまたない。而して現在の地形からみる時に、此の突端の洲は大野島デルタに直接して發達せるものにあらざして、近接して成長しつゝありし小洲を、流水の方向を人工的に轉ぜしめることによつて附近に泥土の沈澱を促し、後に干拓を行つて本三角洲にこれを合併せしめたものであらう。そもそも有明海岸に發達する泥土の淺洲は、其發達の有無、發達の速度、並に形狀の如きは、其處の海岸地形、海潮の運動狀態、或は附近に注ぐ河川の有無等によつて決せられるのである。而して一般に有明海は、其海灣の入口及其兩側には洲の發育不良にして、奥になる程良好である。

然し河口附近に於ては其流水の爲、一道の蛇行水路を残して洲の發達がある。従つて此の附近の洲の形狀は水流の方向を變換せしむることによつて相當に變る。故にデルタの尖端に洲の成生を助成するものとして有力なるものは水制とよぶ護岸工事である。

水制 水制とは千歳川及早津江川（これらは筑後川が大野島デルタによつて二分されてゐるものである）に面する河岸に、ところどころに設けられたる小突堤の言ひであつて長さ數間の突堤を水流に對して突出せしめてある。これは流水の方向を變ぜしめることによつて其の岸を保護するのであるが、他面に於てこれの存在は、滿潮時に海潮が急激に河道に逆することを防止して、其突堤の下流部（突堤側）に其濁れる海潮中の微泥の沈澱を容易ならしむる結果を生む。又滿潮時に海水が海より河道に逆る時には此の水制の上側は水流が緩となり、又引潮時に河水が滔々たる時には水制の下側の水は割合に沈靜なる爲に、渡航或は河舟の碇泊場として使

用されてゐる處もある。過去に於て此の水制の築造により、大野島の南端附近に數個の小洲の發達があつてゐる。例えば早津江川左岸の海路端（天明年間に築造せる水制）及び其下流に作りし突堤によつて、此大野島デルタの最南端に

獨立洲の發生を見た。而して、それは後になつて人工的に本三角洲に接合せしめられて西應久捌として現在綠田となつてゐるのである。又現在の大正捌（大正年間に出來た干拓地）の沖合に存する東西方向の細長き泥土の淺洲は明治四十四五年頃迄は獨立せる洲であつたが、早津江川の水勢の方向轉換によつて、今當に親洲（大野島デルタの南端）に包容されんとして、其中程の僅か一道の水路は全く舟路としての價值はなく、今は牡蠣養殖場として利用されてゐるに過ぎない。斯の如くして千歳川側には五個の水制ありて其河口に於ける泥土の沈澱を助成しつゝあり。即ち千歳川は右岸よりも左岸が深く、右岸には既に三個の獨立洲の發生があり、尙外に二三個の幼き洲があることが第一圖の寫眞に

も見える。此水制の設置は、其岸に於ける水深をして全般的には淺くする傾向あることは前述せる通りであるがこれはやがて其岸側水面の交通的價值を低下せしめるものとなる。

導流堤 從つて筑後川に於ては其河川の交通的價值の低下を防止する爲に、其主流たる千歳川筋に特別の施設を施した。これが即ち次に述べんとする（導流堤）と稱するものである。本稿の第一圖の寫眞の千歳川の川筋中央に南北に一線を劃して見えるものはこれである。これは大野島北端の東方、千歳川の川中に當つて、蘆の密生せる小淺洲から出發して、河道のほゞ中央を南下すること約七軒、川が海に注ぐところに終る人工的な礁である。これを築くには先づ河底に粗朶を竝べてそれに長き杭を打ちこみて其上に石を疊んで、更にところどころにコンクリート又は木の杭を約三十間置き位の間隔をもつて立てゝある。此の導流堤は明治三十年頃に完成されたのであるが、これは満潮時には水によつて全く蔽はれて水面となり、帆船は其上を

自由に通じ得るが、干潮時には露出して、其結果河道は東西に二分されることとなる。而して其一例は大川港通ひの大汽船をも通ずる水深を有するに對して、他の一側は微泥の沈澱多くして其交通的價值は乏しいのである。

大河の河口に大都市の發達を見るは、これ地理的必然である。而して筑後川は我國の河川の中、有數なるものであつて實に豐沃なる文化資源を後背地に有するにかゝはらず、殆んど都市らしき都市の發達を見ざるは何故であるか。これは筆者は次の如く思ふのである。即ち河口に對して海洋よりの接近の困難なること。及び河川それ自身の交通的價值の小さきことが大なる原因なりと思ふ。詳言すれば、有明海が遠淺なること、有明海は干満差があまりに大なること。河の排出土砂の多量が河口を淺くせること。後

背地に礦工產物等の如き特殊物産を有せざること等である。これを更に約言すれば、河口が港灣的價值に甚だ乏しき事であらう。而して此河の下流域には佐賀、久留米の兩市及び大川、柳河町を初めとして諸富、早津江、犬井道等の主部落の發育をみてゐるが、本來ならばこれらを打つて一丸としたる人口二十萬内外の名邑が此の河口に發達すべきであらう。然し此發達が無かつたかはりに、農村背景の小都邑が數多存在するのである。

本稿を終るにあたり、第一圖及び第七圖の寫眞二葉の原板は、佐賀師範學校郷土室に對して太刀洗飛行聯隊の御寄贈にかゝはるものを用ひたものである。尙ほ拙稿をまとめるにあたり、大野島デルタ上の大詫間小學校職員諸子の御援助を感謝するのである。